

國學院大學學術情報リポジトリ

書評 小手川正二郎著『甦るレヴィナス：
『全体性と無限』読解』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平石, 晃樹, Hiraishi, Koki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000147

〔書評〕

小手川正二郎著 『甦るレヴィナス

—— 『全体性と無限』 読解

平石晃樹

『甦るレヴィナス——『全体性と無限』読解』（以後、「甦るレヴィナス」と略記する。同書からの引用は、本文中の丸括弧内に頁数を記す）は、国内外で活躍する気鋭の若手研究者、小手川正二郎氏によるレヴィナス研究の最初の成果である。同書は、氏が2012年2月に慶應義塾大学に提出した博士論文「人格と真理——レヴィナス『全体性と無限』の理性論」をもとに執筆された（「あとがき」より）。

2009年から『レヴィナス著作集』の公刊がはじまり、レヴィナスの捕囚時代の草稿や戦後パリの哲学コレージュにて継続的におこなわれた講演原稿などの新たな一次資料が整備され

つつある。2011年には『全体性と無限——外部性について』の試論（1961年、以下「『全体性と無限』」と略記）の刊行50周年を記念するコロックがフランスをはじめ世界各地で開催されたことは記憶に新しい。以後、レヴィナスのこの第一の名著をめぐって多くの論集や註釈書が出版され、レヴィナス研究は新たに活況を呈している。

小手川氏による『甦るレヴィナス』は、こうした最新のレヴィナス研究の流れに掉さずものとして位置づけられるであろう。本書の目的はしかし、新資料を活用して『全体性と無限』の成立過程をつぶさに跡づけることでもなければ、難解として

知られるレヴィナスの言説を手ぎわよく整理し、その哲学を整合的に再構成してみせることでもない。著者の関心を知るうえで手がかりとなるのは本書のエピグラフである。そこには、1935年に発表されたレヴィナスのマイモニデス論の一節が掲げられている(17頁)。この中世を代表するユダヤ哲学者について、レヴィナスは次のような「簡素ではあるが重大な一つの問い」を投げかけていた——「この思想家は、われわれにとっでいかなる思想家なのか」(「マイモニデスの現代性」)。「甦るレヴィナス」は、この問いをレヴィナスそのひとに差しむけ、「レヴィナスはわれわれにとっでいかなる思想家なのか」と問うことよって幕を開ける。レヴィナス哲学の「現代性(actualité)」を問いなおすこと、これが、著者の第一の関心であると同時に、個々の主張を脇においてまず確認される本書の大きな特徴のひとつでもある。

とはいえ、ある思想の「現代性」を問うことは、それを時代の要請に見あうよう都合よく切りとることではないはずである。「応用」や「適用」を急ぐ研究は、当の思想の解釈としても、個々の具体的な問題に対するアプローチとしても中途半端に終わる危険があるからだ。レヴィナスの思想を「生きている哲学」(22頁)として提示することを企図しつつも、いや、そ

れゆえにこそ、『甦るレヴィナス』は哲学研究としては古典的なテクスト註釈の書であろうとする。そのことは、『全体性と無限』の組みたてをほぼ忠実に踏襲した本書の構成にも反映されている。本書のいわばオーソドックスなスタイルは形式面についてばかり当てはまるものではない。例えば「絶対的に(他)なるものは他人である」や「存在は悪である」といった命題、あるいは「他人への応答」や「暴力」といった本書が扱う主題は、どれもレヴィナスの読者には多少なりとも馴染みのあるものである。その限りでは、本書の論点の選択にはいささかも奇をてらったところはない。しかし、これらの主題をいかに解釈するのか、という段になると、理路整然としたテクストの註釈作業という穏当な装いの背後から、氏によるスリリングなレヴィナス読解が顔をのぞかせる。例えば、レヴィナスが一見すると明確な区別なく用いているように見える「他」にまつわる語彙——*l'autre, l'Autre, autrui, Autrui, les autres*——の詳細な分析(63―66頁)は、「レヴィナスの思想は「他者」論か」(57頁)という意表を突く問いを呼びおこし、ひいては、長くレヴィナス解釈の枠組みに決定的な影響を与えてきたデリダの『他者論』的読解(146頁)の根本的な再検討を要請するに至る。このように、本書は、あまりに自明視されてきたがゆえ

に、あるいは定説が確立されてしまっているがゆえにかえって立ち入った検討がなされてこなかったレヴィナスの主張にこそむしろ照準を合わせ、『全体性と無限』を丹念に読み解くことを主調とする。そして、この作業がレヴィナスの「現代性」を問うことの不可欠な前提となっている。

こうした戦略がもつとも端的に凝縮されているのは、「自我が他人を理解する」という事態を説明することこそ「レヴィナス哲学の中心課題であった」(22頁)、という本書の核となるテーゼにおいてである。この主張は衝撃的でさえある。実際、他人を「理解」することは他人を自我の理解の枠組みに押し込むことではないのか、とすれば、この主張は「レヴィナス哲学の中心課題」とはまさに逆のことを言っているのではないかと読者は訝しがることであろう。しかし、氏の議論を追うなかで気づかされるのは、実はこうした疑いそのものこそ、知や理性との断絶をもつばら強調する従来のレヴィナス解釈の先入観に由来するのではなかったかということである。本書の第6章によれば、レヴィナスにとって問題であったのは、他人の不可知論を結論することでも、他人との関係を純粹に精神的な交流として描くことでもなく、他人を理解するという能動と他人を迎え入れるという受動とが混然一体となるなかで理性のはたら

きを把握しなおすことである(165―169頁)。「他人との関係の担い手」(166頁)としての理性という観点からレヴィナスの哲学に迫ることで、本書は、知らぬ間に読者がとらわれてきたレヴィナス像の抜本的な見なおしを図っている。形式的にも扱う論点の選択にしても正攻法を貫く本書が他方で数々の新鮮な驚きを読者に与えるのは、従来の解釈を次々に顛倒させてゆくこうした読解の身ぶりに由来する。だからこそその「甦るレヴィナス (Levinas revivant)」なのだろう。レヴィナスを「生きている (vivant)」哲学として提示するためには、定説や通説によって生気を失ってしまったレヴィナスの哲学にまず息吹を与えなければならぬ――本書の表題からは著者のこのような声が聞こえてくるかのようである。

レヴィナス哲学の「現代性」を問う地平は、以上の読解作業によってはじめて開けてくる。ここで注目したいのは、レヴィナスの哲学の「具体化 (concretisation)」という論点である。「具体化」は何よりもまず、『全体性と無限』の現象学的方法のかなめをなすものである。本書の第1章によれば、具体的な状況によってこそ、分析によってだけは見えてこない概念の諸側面が可視化される。その意味で、「具体化」は、抽象的な議論をよりわかりやすくするための例示ではなく、概念のより正

確で豊かな把握を可能にする厳密な方法として理解される（43—48頁）。これまで表だって検討されてこなかった「具体化」という方法に光をあてたこと自体、本書の優れた功績のひとつである。だが、本書はさらに進んで、この「具体化」をレヴィナス解釈の方法そのものとして実践している、ということも、等しく強調されねばならない。小手川氏自身による「具体化」は、レヴィナスの提示する概念を理解するという水準で、そして、レヴィナスの哲学を彼が実質的には論じていない諸問題へと開くという水準で遂行される。前者については、本書の随所に散りばめられた——ときに丸括弧内に補足された——さまざまな具体例が目を惹くことだろう。例えば「汝、殺すなかれ」という他人の顔が発する私への訴えかけについて、著者は、ではこの命題は著しい苦痛を伴う延命治療の無条件的な要請として理解されるのか、と問い返す（192頁）。あるいは、複数の他人による私への訴えかけの拮抗が問題となる際は、殺人を企てようとする人に対する嘘が正当化されるのかどうか、という、カントに対して提起された名高い事例にそって考察が深められてゆく（196頁、208—209頁）。さらには、「他人を理解する」という事態の内実に向るときには、異なる文化圏に属する者同士がある特定の食べ物を食べることは是非をめぐって対話をする

という場面が設定される（170—171頁）。「具体化」という方法をまさに自家菜籠中のものとしてレヴィナス読解そのものに適用することで、本書は、レヴィナスの哲学が各々にとつてきわめて身近な事象に根ざしたものであることを読者に訴えかけている。

また、レヴィナスの哲学を開くという水準について言えば、終章の第2節「『レヴィナス的倫理学』は可能か」が最良の参照箇所となる（258—273頁）。そこで著者が目論むのは、レヴィナスの思考から出発して一般的な見方や従来の考えを揺り動かす、もつて個々の現実的な問題に対する別様の視座を示唆することである。具体的には、「障碍者」、「胎児」、「動物」と「私」との関わりが議論の俎上にのせられる。そして、これらの問題を検討するなかで、しばしば人間中心主義との烙印を押されてきたレヴィナスの「他なる人間主義」の意義もともに救いだされることになる。他の多くの哲学者と同様、レヴィナスもまた、自身の思想が現実の諸問題に対して実践的な指針や即効性のある回答を提供するとは考えていないことだろう。他方でしかし、ときに思弁的な断言の集積にも聞こえるレヴィナスの言説が現実的にとどのような意味を有しているかを問うことは、レヴィナスを専門的に読む者にとつては避けて通れない問

題でもある。たとえ「レヴィナス的倫理学」の可能性をめぐる本書の考察は「準備作業」(259頁)という萌芽的な段階にとどまるものであるにせよ、この問題を正面から引き受けた著者の真摯な姿勢は本書の掛け値なしの魅力であると言える。

『甦るレヴィナス』は、小手川氏自身のレヴィナス研究の到達点というよりはむしろその途上に位置づけられるものである。というのも、本書の議論の対象は、ほぼ『全体性と無限』に限定されているからだ。例えば、『全体性と無限』に比して感性の領域により深く切り込む『存在の彼方へ』の哲学は、氏の目にはどのように映るのだろうか。あるいは、本書が意図的に考察の外に置いたレヴィナスのいわゆる「宗教的テキスト」に認められる種の理性主義に対して、氏はどのような評価を下すことになるのだろうか——これらの問いは氏の来たるべき著作において検討されることであろう。ともあれ、『甦るレヴィナス』において披歴された氏の読解はその鮮烈さゆえに読者に何がしかの応答を惹起せずにはいられない。その意味で、本書は、今後のレヴィナス研究にとってひとつの重要な文献となることはまちがいないだろう。(A5判、三四四頁、水声社、二〇一五年二月発行、定価三五〇〇円＋税)